

レポーター：山口さん、こちらの作品は、なんだかかわいらしいといたしますか、子供が描く絵のようななんか愉快的感じがしますね。

学芸員：そうですね。ちょうど幼稚園児がね、描いたみたいな感じするでしょ。なんかこの辺とか、バイキンマンみたいなね。

レポーター：なんだか毛虫かなと思いました。

学芸員：不思議な動物というか、人間というか。なんだかよくわからないような生物が。

レポーター：たくさんいますね。

学芸員：うん。一番特徴的なのはこの目玉ですね。目玉がこうぎょろぎょろっとしてて。

レポーター：みんなを見てるぞみたいな。

学芸員：とってもユニークで、なんかちょっとふっと笑っちゃうような、そんな。

レポーター：楽しくなりますね。

学芸員：うん。なんだか自分でも描けそうな感じしませんか、これ。

レポーター：ちょっと描けるかなとちょっと思ってたけど、口には出しませんでした。

学芸員：けど、こう、子供の絵というと皆さんちょっと下手な、未熟な、うまくなる前の絵という風に皆さん思いがちなんですけど、ところがね、子供みたいに描くっていうことが一番難しい。多分、うまく描いてくださいというと、うまく練習すれば皆さん描けるようになる。

レポーター：練習すれば、はい。

学芸員：下手に描けっていわれたら、これは練習したって無理なんですよ。

レポーター：おおー。

学芸員：練習すればするほどうまくなっちゃって、下手に描けないと。

レポーター：そうですね。考えてみたこともなかったです。

学芸員：現代美術を見るときの一つのポイントが、こう、うまいか下手かっていうどこか超越したようなね。絵をどう自分で判断していくか、というところが一つ大事なところになります。

レポーター：面白いですね。

学芸員：これ描いたのはジョアン・ミロといいまして、うちで所蔵しているダリと同じく、シュルレアリズムの運動にかかわった画家なんですね。シュルレアリズムというのは、つまり人間の理性では描けない作品、つまり無意識ですよ。人間の奥底に秘めた欲望だとか、表現の衝動とか、そういったものをなんとか抉り出して、新しいものを創造しようとしたまゝ運動なんですけども、ダリは非常に迫真的な描写をしたんですけど、ミロはその真逆ですよ。まさに子供が描いたような、つまりうまく描くんじゃなくて、その逆でいかにその崩して、今までのそのいわば西洋美術の非常に迫真的な描写から離れるかということをやった方なんですね。だから、ダリの絵は非常

に奥行き感があるんですけど、この絵は奥行き感が全然なくて、どっちかというとぺたーんとした絵なんですよ。で全体として、その非常に抽象的な感じがしますよね。だけど、そのところどころに、なんか目玉があって、その目玉を中心に顔のようなものがある、なんかここに人物がいるような感じ。実はこれ教会の中を描いていると。

レポーター：ええー。踊り子さんが、周りにたくさんいる感じですか。

学芸員：ここに十字架がありますけども、これがどうもそのキリスト教を表している、という風なこともいえるんじゃないかと思います。オルガンの演奏を聴いているミロが自分の心の中にあらわれてきたイメージを描いたという風に見た方がいいですよ。

レポーター：あーあー。

学芸員：でちょっとこれ、制作年にもちょっと注意していただきたいんですけど、1945年とこれなってます。まあ、要するに、終戦の年ですよ。まあまだそのころヨーロッパにも戦乱が続いてた。45年、これ描かれたときはまだ戦争終わってなかったんですけども、戦火を逃れて、ミロがマヨカ島という場所にちょっと逃げていた時期の作品で、戦乱の中で自由な発表とか絵も描けずに、まあ自分の心の中を素直に、船室のオルガンの演奏を聴きながら、見つめていた作品で、あるという風な解釈もなされています。

レポーター：んー。

学芸員：非常に天真爛漫な雰囲気がある一方で、まあ非常に心の静けさというものをなんとか取り戻そうとした、ミロの心の叫びのようなものが実はこの作品の中にはあるんじゃないかなと思います。

レポーター：何か愉快さはあるんですけど、周りが黒くって、星があったりだとか。

学芸員：ええ。

レポーター：何か。そうですね。

学芸員：そうですね。空間を超越している。つまり上の方が空で、下の方が陸ですよ、そういった空間じゃなくて、全体がすごくこう空のような感じもあるし、でもここが地面のような感じもするしというんで、子供の絵を見ているときにどこが空でどこが、地面がここでという、そういう区別ないですよ。好きな場所に好きなもの描いているっていう。

レポーター：自分が好きなものは大きく描いて。

学芸員：そういった絵っていうのはなんかこう、子供の時は描けるけども、大人になって描こうと、描けなくなっていくんですよ。どんどんどん。つまり、絵が普通の絵になっていくっていう。ミロはそうした心の中のその子供っぽさっていうのは決して忘れることはなかった、むしろ子供に近づいていったとする、いえる方ですよ。

レポーター：はー。

学芸員：そういった見方をするっていうのも、現代の絵画を見る上でも一つの重要なポ

イントなんでしょうね。いかに伝統的なものから離れていったかと。まあそういったその絵画の革新がやって来たのが 20 世紀の美術なので、このミロの作品っていうのは、20 世紀の絵画というものを考える上で一つ重要な作品であるという風にいえると思いますね。